2018 年度

卒業論文集

2019 年 3 月

慶應義塾大学法学部政治学科

塩原良和研究会

指導教員より

ご卒業おめでとうございます。というか、誰が卒業するんだっけ？　みなさんは、誰がどこで何をしているのか把握しきれない、我が道を行く人たちの集まりでしたね。真面目すぎる人から落ち着きがなさすぎる人まで、多様性に富んだみなさんの様子を、教室やフィールドで眺めるのがとても楽しみでした。

優秀な卒論を書く人もいれば、教室で議論の雰囲気を創ってくれる人、フィールドで輝く人、そのどれでもないけれど、なぜか存在感がある人、いろんな人がいます。大学だから、良い論文を書いて授業中にすぐれた見識を示した人に良い評価をつけなければなりません。でもフィールドやそのほかの場所で見せてくれる、みなさんの人間としての資質を思うと、「S」とか「A」とか PC 画面に入力している手が止まります。自分はこの人を、適切に評価できているのだろうか。そもそも僕に、この人に成績をつける資格が果たしてあるのだろうか。考え込んでしまうこともあります。他人を評価するとき、他人を評価している自分こそが真っ先に問われます。

みなさんと過ごした 2 年間、授業のやり方がいつもうまくいっていたわけではないと思います。残念ながら、ゼミを最後まで続けることができなかった人もいました。それぞれ事情があるし、その事実だけですべてが決まってしまうわけではありません。人生は常に予測しがたいものだから、いまは離れた人たちと、また繋がることも、きっとあるでしょう。たとえ卒論を書かなかったとしても、みんな、このゼミの卒業生だと思っています。

それだけに、この小冊子に収録された卒業論文は輝きを放っています。みなさんの努力と思いが込められた論稿は、客観的に見てとても水準が高いと思います。勉強に限らず、さまざまな活動に取り組んできたみなさんが、これだけのものを成し遂げたことに、どうか自信をもってください。と同時に、みなさんの指導教授であったことに、僕もささやかな誇りを持ちたいと思います。そんな些細な体験の積み重ねの先に、自己と他者へのしっかりとした信頼が生まれてくる。そういえば、そんなことを僕たちはフィールドで学んできましたね。

卒業してからも、またどこかでお会いしましょう。相談事や頼み事でもあれば、いつでも連絡してください。指導教授としての仕事は、みなさんが卒業しても、終わりではありませんから。

でもひとまず、この 2 年間、本当にありがとうございました。お元気で。さようなら。

2019 年 3 月

慶應義塾大学法学部教授
塩原良和

2018年度卒業論文一覧

「楽園」と「日常」のハワイ――日本との関係性から
道脇　理紗

多文化共生に向けた「居場所づくり」の可能性
新井　真帆

貧困世帯の子どもを対象とした学習支援教室の意義
――川崎区「ふれあい館」の取り組みから
加藤　咲月

オーストラリアの移民政策におけるポイント制度変遷の歴史
久保　絵理菜

グローバリゼーションとナショナリズムの関係性から考える
現代日本の多文化共生に対する意識
椎野　真帆

音楽を通した子どもの自己実現の場の拡充
――エル・システマジャパンの活動から
今井　絢梨

多様性とイノベーションの関係
岡田　圭司

性別役割分業意識と女性のライフコース選択の規定要因
江口 瑠咲

移民児童に関する取り組みの日仏比較
小島和真

帰国子女の就職実態について
――「グローバル人材」という言葉の曖昧さに翻弄される帰国子女
大塚　愛

（学籍番号順）